



横浜市立あざみ野第二小学校  
スマイルあざニっ子～9月号  
第6号 令和3年9月16日発行

「スマイルあざニっ子」は、子ども達に直接伝えるために、プリントで配布します。ご家族でもお子さんといっしょにお読みいただくと幸いです。(学校ホームページにも掲載します。)



# みんなちがって みんないい



校長 宇都宮 桂

分散登校が続いています。多くの方が学校と家庭での勉強を1日おきにしています。家庭でのオンライン授業や課題学習は、きちんとすすんでいますか。わからないことがあったら、先生に聞いてください。聞くことは恥ずかしいことではありません。そして、健康に気を付けながら勉強を進めていきましょう。

さて、8月24日から9月5日まで東京パラリンピック2020が開催されました。パラリンピックは、うで、あし、目などに障がいのある選手が、障がいの程度に分かれて競技をする世界一の大会です。世界中から集まり、22競技539種目の競技が行われ、日本からは選手254名、競技パートナー23名が出場しました。また、パラリンピックのマークは「スリーアギトス」と呼ばれています。アギトスとはラテン語で「私は働く」という意味で、困難があっても諦めずに限界に挑戦するパラリンピアンを表し、赤が心、青が精神、緑が身体を表現しています。



みなさんはパラリンピックを観ることがありましたか。校長先生は、観始めるとつい気持ちが悪われ、観終わったあとにいつも心がキュンとなりました。その競技や選手の話をお伝えします。

一人目は、競泳の木村敬一選手です。木村選手は2歳のときに病気で目が見えなくなりました。今まで3大会連続でパラリンピックに出場しメダルを6個獲得しています。今回、男子100メートルバタフライS11で初めての金メダルを獲得しました。そして、「僕は表彰台に上がってメダルをいただいても、それが何色か見えない。国歌を聴いたときに自分が金メダリスト、世界チャンピオンになれたんだと感じることができた」と話されていました。目が見えない木村選手には、国歌が聞けること＝金メダルを取った実感が沸き、目が見える人はメダルの色などで1位、2位…がわかると、人によって感じ方の違いがあることを、あたらめて実感しました。

二人目は、ボッチャの杉村英孝選手です。生まれつき障がいがあり、高校3年生からボッチャを始めました。今回3回目のパラリンピック出場場で、個人BC2クラスで初の金メダルを獲得しました。「ビッタビタ」という言葉が生まれたように、ジャックボールという白い的球に自分の球をピタリと付ける正確なコントロールがとてもしばしばありました。そして、「障がいがあってもなくても関係ないと思えるきっかけ



が、この大会で生まれればうれしい」と話されていました。ボッチャは、運動の得意不得意に関係なくだれでも行うことができる競技です。是非、みなさんにも楽しんでもらい、そこからいろいろなことを感じてほしいです。

三人目は、マラソン女子（視覚障がいT12）の道下美里選手です。中学生のときに右目を失明。25歳で左目の視力もほとんど失いました。31歳でマラソンを始め、2016年リオデジャネイロパラリンピックでは銀メダルを取りましたが、くやし涙を流しました。今回、大会新記録で金メダルを獲得しました。そして、「5年前の忘れ物を取りにいこうとスタートラインに立ち、しっかりテープを切れた。ああ、これが夢に見た舞台、幸せだな」と話されていました。また、目が見えない選手が走るには、いっしょに走ってくれるガイドランナーが必要です。「まるで見えているかのように走らせてくれるガイドランナーの存在があって自由に羽ばたける」とも話していました。練習のときには約12名のガイドランナーがサポートし、チームで取った金メダルだと感じました。また、他の競技では「タッパー」「コーラー」「アシスタント」など選手を支える競技パートナーがいて、その存在も大切です。



四人目は、車いすテニスの国枝慎吾選手です。9歳で病気になり、車いす生活となります。国枝選手は、今までパラリンピックで2大会連続で金メダルを獲得していました。しかし、前回の大会では敗れてしまいました。今回、9年ぶりに金メダルにチャレンジし、見事獲得することができました。辛いときもありましたが、「オレは最強だ」「できる」「やることはわかっている」と自分に言い聞かせて、練習に取り組んだそうです。強い気持ちをもって取り組むとめあて達成につながりますね。



このほかにも、団体競技として車いすラグビー、車椅子バスケットボール、ボールゴール、そして、ブラインドサッカーでも、ワクワク・ドキドキの試合がみられました。紹介した競技以外にもすばらしい選手がたくさんいます。大会は終わってしまいましたが、インターネットなどで調べるとたくさん出ています。是非、知ってほしいです。



生まれつき障がいがある選手、事故で障がいを負った選手、病気で障がいを負った選手、一人ひとりの障がいは違います。そして、障がいがあるなしに関わらず一人ひとりに得意なことあれば、苦手なこともあります。「みんなちがって、みんないい」のです。みなさんが自分も友だちも大切にして、自分の可能性を信じて「なりたい自分」めざして挑戦してほしいと改めて思いました。

また、メダルをめざしてひたむきに挑戦していく姿に心を打たれました。「こんなことまでできるんだ」「そこまでやるんだ」「限界なんてないんだ」と思う日々でした。「失ったものは数えるな、残されたものを最大限生かせ」という言葉あります。これは「パラリンピックの父」と呼ばれる医師ルードウィヒ・グットマン博士のことばです。今は、感染症対策をとる毎日です。

そんなときだからこそ「できないことを数えるのではなく、今、できることに挑戦しよう！楽しもう！」だと考えます。

東京パラリンピック2020でみなさんは、何を感じたでしょうか。校長室に来てもいいし、タブレットを使ってもいいので、校長先生に教えてもらえると嬉しいです。

